

# スロベニア話題集

～小さな国の大いなる魅力と日本との秘められた関係～

在スロベニア日本国大使館

平成29年2月現在

# 目次

1. スロベニア人の特徴とは？
2. 周辺国の特徴に磨きをかけた、良いところ取りの魅力と治安の良さ
3. 皇族が寄せるご関心とブレッド湖畔の手植えの桜
4. 日本からスロベニアへの旅行者と ANA 夏季チャーター便の到着
5. 小さなスポーツ大国スロベニアと葛西選手の高い知名度
6. 不毛な土地柄転じて、ワイン栽培と大鍾乳洞という、喰える土地柄に
7. 伝統的に高い言語能力と日本語を学ぶスロベニア人
8. そば文化を始めとする豊かな食文化を通じた日本との交流
9. リピツァの白馬
10. 小説・映画の舞台となったソチャ川
11. 姉妹都市関係
12. スロベニアにおける武道、茶道と華道の普及
13. 日本との大学・学術・研究交流
14. 東日本大震災～小さな国スロベニアからの大きな支援

## 1. スロベニア人の特徴とは？

**ポイント**→スロベニアはスラブ人の国だが、生活態度は最も西欧に近い。時間を守る、道路や公園を含め生活環境が清潔、外国人との関係を含め丁寧な人間関係、生活の質と良質な環境に大きな関心と配慮。また、外国語が格別に達者。

### 何故か？

- スロベニア人は、1991年に旧ユーゴから独立するまで国家を持った経験がない。逆に、特に、13世紀から1918年にオーストリア帝国崩壊に伴う独立に至る約600年の歴史の中で、民族のアイデンティティーを守りながらも、質の高い工芸品やワインなど農産品、宮廷用の白馬の育成など、高いニーズに応えながら技量と生活の有り様を習得し、柔軟に歴史を育んだ。このハプスブルク宮廷の工芸・農産品等の供給のための後背地という性格こそが、スラブ人でありながら、丁寧な仕事振り、納期や約束時間を守る律儀さ、穏やかな性格が醸成された。
- スロベニア人は6世紀から現在の領域方面に定住を開始したが、その後の民族配置を詳らかにすると、沿岸地帯は旧ヴェネチア共和国領の拠点となる都市国家（コペル、イゾラ、ピランなど）にはヴェネチア人が住み、主に内陸地域を中心に居住し、農業中心の生活であった。活気に溢れ、エジプトやビザンチン帝国方面等に積極的に打って出て、外交術や複式簿記を生み出したヴェネチア人との接触が、農耕民でありながら柔軟で目端の利く性格を形作った。
- 他方、ユーゴ王国を形成し（1918年）、ユーゴ社会主義連邦構成共和国となり（1945年）、初めて独立国家としての歴史を開始した（1991年）。50年近い、自主管理的なユーゴにおける経験は、以上と異なる左派的な発想を強く残した。独立25年を経過した現在でも、政界・政党分布は基本的に左派中心であり、中道右派は事実上存在せず、重い年金・医療負担、欧州でも例がない程の労働者保護法令と慣習などが顕著である。柔軟で勤勉な労働姿勢よりは現状に満足し厚い労働保護法令の中で家族生活を重視し、生活所得経済水準の更なる向上にはあまり関心を示さない、という現状肯定・現状満足維持姿勢を生み出した。【注1】
- 民族がアイデンティティーを維持する上で、歴史維持努力と共に、言語の果たす役割が大きい。使用人口規模の小さいスロベニア語は周辺国と同じくスラブ語系言語だが、例えば、セルボ・クロアチア語と異なり、「双数」（名詞が2つのものを表す形であり、あなた方の他に「君たち二人」を表す）が現存している。文法的には一般的に難しいスラブ語の中でも格別に難しく、これが逆に民族の特徴を強く維持できた理由の一つ。また、自国言語が難しいため、外国語は須く習得するのに比較的容易であり、多くのスロベニア人が都市部と沿岸農村山岳部を問わず、英語、ドイツ語、イタリア語を達者に使える理由の一つでもある。日本語は世界の孤立語であり習得は同じく難しいが、この難しさと外国との接触頻度の少なさが外国語習

得の障壁になっていることとは、大いに異なる。

【注1】これは、独立当初、労働者がいわば「株主」でもある自主管理経済社会の伝統を守り、雇用を最大限守るために、劇的な外貨導入や不良採算企業の淘汰を行わず、漸進的な経済体制の転換を図ったことも背景にある。他の旧東欧諸国に見られた社会問題が生じることなく、ユーゴ重視型の経済体制を西欧重視型にいち早く切り替え、数年間で経済成長の低下を取り戻し、旧ユーゴ内、旧東欧内で最良とされる経済水準の維持に成功した（25年間でGDP規模は約100億ユーロから395億ユーロへ、また一人当たりのGDPは約5千ユーロから約19,000ユーロに拡大。平均寿命は女性77.5歳から83.5歳に、男性69.5歳から78歳に大きく伸びた。国際環境としては、2004年、NATO及びEU加盟。2007年、ユーロ導入。同年12月にはシェンゲン加入。2008年前半には新規加盟国で初めてEU議長国）。しかしながら、現在のところ、一步上の経済水準に到達するには、こうした独立当初の付けが回ってきている状態であり、年金・保険制度の抜本的な改革、柔軟な労働法制への転換、起業支援の強化等が強く求められている。ある意味で、現在は第二の改革が行われるべき時期にとうに達していると言え、政界、官界、労働界を問わず、発想の転換と戦略の転換の実施が求められている。

## 2. 周辺国の特徴に磨きをかけた、良いところ取りの魅力と治安の良さ

- この国は北にオーストリア、西にイタリア、南にクロアチア、東にハンガリーと接している。よって、農産品や言語、気質に隣接諸国の特徴が特に周縁部において重ね合っている。その結果、この小さな国に50以上の方言があり、東北部のハンガリー隣接地域の話し言葉は中央部には理解しにくく、使用外国語も北東部ならドイツ語、東部ならハンガリー語、西部なら圧倒的にイタリア語、南部ではクロアチア語が楽であり、共通外国語として英語がしきりに使われている。
- かつてオーストリア大公は、グラーツ南部方面の現スロベニア領におけるブドウ畑の良質さに驚き、ワイン生産に梃子入れし、同時に、南西部の宮廷牧場において、ハプスブルク宮廷スペイン乗馬学校用の白馬の育成に力を注いだ。ブドウの独自品種は数多く、盛んな有機栽培やアンフォラワインなどを含め、多種多様なワイン造りが盛んである。棚田という棚田が完成域に達するほど念入りに作られており、土地の爨という爨毎に異なるワインが生まれている。こういう知られざる小さなワイン大国に甲州ワインを売り込むのは、実は至難の業である。ワインや果実酒作りに熱意と伝統があるだけに、他方、フレッシュな白ワインのような味わいを示す日本酒（例えば、福井の梵）や梅酒（例えば、紀州の梅酒紅南高）には大きな可能性がある。
- なお、スロベニア国内には400以上のワイナリーがあるとされ、スロベニア第二の都市マリボルには、樹齢400年以上と、ギネスブックにも登録された世界最古のワインぶどうがある。また、ポルドーと関係の深い塚本俊彦（株）ルミエール

(山梨県のワイナリー) 取締役会長は、旧ユーゴ時代から国際リュブリャナ・ワインコンクールに協力してきており、2006年11月には、その功績を認められ、ドルノウシェク大統領(当時)より日本人初の功労賞(The Order for Services)を授与された。現在では、ご子息の木田茂樹社長がワインコンクール審査員として、その業績を継いでいる。また、同会長夫人の塚本レイ子取締役(山梨大学副学長兼理事)もご夫君と共に、スロベニア産品(ワイン、そばパスタ、ピランの塩、スペルト古代小麦など)の輸入に尽力している。

- 日本へのワインの輸出としては、地中海沿岸に本拠を構えるヴィナコペル Vinakoper 社が対日輸出を模索している他、ワイン産地の一つであるブルダ(小さな丘ブルダが連続する)地域のシュチュレク Scurek 社(スロベニアのワイン業界のリーダー的存在)やバティチ Batic 社(赤坂溜池には、同社名を借りた赤坂ビストロ&ワイン バティチ Bistro Batic があり、同社のワインを楽しめる)などが長年対日輸出を展開している。また、北東部のマロフ Marof 社は、伊勢志摩サミットが開催された伊勢の著名牡蠣専門店が白ワインを提供し、対日輸出を好スタートで開始した。スロベニアのワイナリーには、数百年の歴史はざらであり、日本でも希少価値に富むワインとして評価されている。Koshu の手強い相手である。
- イタリアで著名なトリュフやプロシュートはイタリア隣接地域で更に磨きがかかり、微妙な味わいを生み出している。特に、東北部国境地帯にあるコディラ Kodila 社の超高級生ハムは、ブドウ畑の特徴でもある低木桃(いわゆる「蟠桃、平桃または座禅桃」。ブドウに脅威となる病害虫に侵されやすい性質を利用して、病害虫を早期発見するためにブドウ畑の畝に植え込み、桃の木が罹患すれば早期に手を打つ)と組み合わせると絶妙な味わいである。夏場の絶品の一つ。
- ある意味で、この国は、採算度外視のこだわりの農産品の宝庫である。優れた農産品を生み出すが、スイスと同じく、難点は多品種少量生産にあるため、対日輸出まで繋がり難い。作り手の気質として、旨いがあまり宣伝をしない、自分たちのプライドをかけて生み出すので、納得する年の製品しか売らない。その分、消費者にとっては堪らなく関心をそそられるのは無理がない。
- こうした農産品を生み出し土壌と環境は、スロベニアが誇る対国土森林比率に看取できる。最新の統計では、森林の豊かさという面では、国土の60.2%を占め、スウェーデン(75.6%)、フィンランド(71.8%)、エストニア(60.6%)に次ぎEU28カ国中四番目、その森林規模はルクセンブルク、キプロスとマルタを合わせた規模である。パホル大統領によると、そろそろエストニアを抜き去る勢いだという。生物の多様性のために保護された土地の規模でも、スロベニアはEU28カ国中最大比率を持つ(40%弱)。
- スロベニア国土を生み出す自然景観は、地中海を挟んだ南北の造山活動の結果生まれたアルプス(ジュリアンアルプス)を北部に抱きながらイタリアのドロ

ミテ山系に繋がり、東はハンガリーのパンノニア平原に類似する景観を生み出し、南西部では一見不毛なカルスト地帯や湿地帯を生み出しており、換言すれば、アルプス山脈と地中海地域とパンノニア平原地域が会合する点である。スロベニアには約42kmの海岸線を有する「海洋国家」でもあり、ヴェネチア共和国の伝統の一環を担っている。それで、今でも、「南シナ海事案」には真っ当な理解と関心を示している。この国は、山川湖、平野と海、カルストから鍾乳洞まで、多種多様な自然に富んでいる。

- ここでは国土が小さいことが利点に転換している。関心とその日の天候に則して、欧州でも知られている溪流釣りやトレッキング、山岳登山や山歩き、葛西選手が毎年来訪するジャンプ場でも有名なスキー、ブレッド湖やザグレブ(クロアチア)に近い要路ブレジツェ近郊で知られるゴルフ場など、短時間で行きたい場所に到達したつぷりと楽しめる。自然もスポーツも食材も、好みのままである。懐の深い国土で慈しまれる農産物を自然景観豊かな土地で楽しめて、距離も内容も良いところ取りと言える立地である。リュブリャナに滞在しつつ、東西南北に移動して楽しむのも、個人旅行としては面白い発想である。
- 何よりも最近富みに魅力を増しているのは、「安全さ」である。一般犯罪が少ないこともあるが、テロの脅威は極めて低い水準とされている(国家安全保障委員会会合結果)。もともと女性が夜一人で出歩けるといふ、欧州でも希有な治安状況があり、昨年以来の難民問題も少なく(一時期は200万人の国に40万人以上の難民が押し寄せた)、イスラムテロの脅威も押さえ込まれている(イスラム人口は3%程度であり、しかも穏健なボスニア系が中心)。また、市民が外国人に示す穏健さ、丁寧さ、優しさは昨今格別である。これは、自国を持たなかったスロベニアの歴史上、他者との共存こそが生き抜く条件であったため、常時変遷する周辺環境に良く順応した国民的資質であると評価したい。

### 3. 皇族が寄せるご関心とブレッド湖畔の手植えの桜

- 数ある魅力の中でも、氷河湖として知られるブレッド湖は、この国最大の湖でありしかも島を擁する唯一の湖である。四季を通じて観光客を引き寄せ、車で20分ほどで到達し、更に自然保護度の高いポーヒン湖と並び、魅力的な避暑地である。
- ブレッド湖は我が国皇室との関係が深い。1976年当時、皇太子同妃両殿下が旧ユーゴ内各共和国を歴訪された際、最後に訪れたのがスロベニアであり、両陛下は今でもスロベニアの落ち着きの良さ、訪れられた農家の皆様の暖かさ、ブレッド湖の美しさに触れられている。皇室では、その後、スロベニアのことをお聞きになって育てられた殿下方がスロベニアを訪問されている。2000年、清子内親王殿下(当時)は、「(財)日本さくらの会」(会長は衆議院議長、

会員は衆議院議員有志) がスロベニアに寄贈した桜をリュブリャナ大学生物学研究所に植樹された他、2013年には秋篠宮同妃両殿下がブレッド湖を御訪問された際、ブレッド湖市庁舎前で桜の植樹をされ、今では着実に育ち花を咲かせている。なお、日本さくらの会により植樹された桜は、植樹先の水害被害等を受けて、現在、植え替えを鋭意検討中。

#### 4. 日本からスロベニアへの旅行者と ANA 夏季チャーター便の到着

- 2016年にスロベニアを訪れた日本人は、スロベニア観光庁調べによると、到着人数29,216人(対前年比マイナス19%、全外国人観光客到着人数の1.0%)、延べ宿泊人数45,805人(対前年比マイナス17%、全外国人観光客宿泊人数の0.6%)。これは、スロベニア国内に一泊した邦人観光客統計であるので、例えば、クロアチアと組み合わせたツアーによる邦人観光客数はもっと多いと予想される。実際にも、シニア層に多いが、スロベニア観光旅行をした方々とは良くお目にかかる。また、最近の傾向としては、旅行会社 H. I. S. もセールしているが、欧州在住邦人にスロベニア観光滞在の関心が高まっている。スペインもそうだが、欧州域内で安全な国に関心が集約され、1~2週間という比較的長期滞在が特徴である。
- 日本からのスロベニア観光喚起面でも努力が続けられており、スロベニア観光庁が9月の JATA 旅行博(日本観光見本市)に出展するなど努力を続けている。日本人観光客数は2008年以降は4万人前後で推移していたが、2016年は3万人を割り込み、29,216人となった。スロベニアでの滞在数増加(現在では平均1.5日)が目指されている。特に、2008年以降、毎年、JTBが中心となりチャーター便を利用した「スロベニアとクロアチア」商品を完売しており、2012年にはJTB、阪急交通社、KNTによるJALチャーター便が合計8便就航した。これに続き、2016年8月にも、JTB他と全日空によるチャーター便6便が毎週土曜日に就航し(内4便がリュブリャナ空港着ドブロブニク(クロアチア)発、残りの2便はドブロブニク(クロアチア)着リュブリャナ発、各便約300名が搭乗)、当国観光局が空港にて歓迎式典を行った。日本からは4名のジャーナリストも同行し、スロベニア探求の観光取材旅行を行った。2017年は2便が就航予定。

#### 5. 小さなスポーツ大国スロベニアと葛西選手の高い知名度

- スロベニアはスポーツが盛んな国である。スキー、サッカー、アイスホッケー、ハンドボール、バスケットボールなどであるが、就中、スキーは人口約200万人のうち、およそ1/3の国民がスキーを楽しんでおり、ジャンプ、スキーボードなどは特に著名である。アイスホッケーは隠れた人気交流スポーツであ

り、国際ランキング上はかつて日本の方が上であったが、今では逆転され、日本のナショナルチームとユースチームは毎年のようにスロベニアにおいて交流試合と合宿を行っている。スキーやアイスホッケー好きのスロベニア人には、日本のアイスホッケーチームは近い存在である。若いときにアイスホッケーに没頭したスロベニア人は多く、ビジネス上も親しい話題となっている。

- リオ・オリンピックには小国スロベニアとして、13個人種目と1団体種目に合計60人の選手を派遣し、個人種目43人中、女性選手は22人（51%）を占める。スロベニアは1991年の独立以来4度のオリンピックに参加し、平均して4～5個のメダルを獲得しており、メダル獲得国としては上位6カ国に属す。柔道でも、女子63kg級や男子73kg級の選手は欧州選手権でもメダル獲得者であり、大いに活躍している。2012年のロンドン・オリンピックでは、スロベニアは柔道で金、陸上トラックで銀、ボートと射撃で銅と、計4個のメダルを獲得しており、人口比メダル獲得数比較（[www.medalspercapita.com/](http://www.medalspercapita.com/)）によれば、住民数約52万人に対して一個のメダル獲得となり、少なくとも一個のメダルを獲得した85カ国中6位（欧州諸国では最高位）であった。また、2016年のリオデジャネイロ・オリンピックでは、柔道で金及び銅、セーリング及びカヌーで銀の計4個のメダルを獲得し、同ランキングにおいて86カ国中7位（欧州諸国では3位）となり、国力に応じたメダルを効率良く獲得している。
- こうした状況を背景に、日本でも知られるスキー板のメーカーとしてエラン(Elan)社がある。同社は旧ユーゴ時代から著名なスロベニア企業であって【注2】、女子スキージャンパーの高梨沙羅選手もエランのスキー板を使用している。2015年のスキージャンプW杯シーズンでは、女子ではこの高梨選手が、また男子ではスロベニアで有名な若手ペテル・プレウツ選手が優勝している。
- 特筆すべきは、長年この国を試合と練習のため訪れている葛西紀明選手は、スロベニア人の間で圧倒的な人気を誇っていることである。葛西選手は気さくな性格であり、スロベニア語の歌と一緒に歌い、交流を深めており、我が国がスロベニアに派遣する最良の「スポーツ交流大使」である。当国に在勤する大使館員であれ、民間企業の皆様であれ、この「葛西コール」のお陰を大きく被っている。スロベニア人にとって、大統領から市井の人々まで、葛西選手は「仲間」であると同時に、40歳を遙かに超えてしかも国際競技に出場し入賞し続けている葛西選手は「超人」であり憧れの対象であって、母国日本への嘆賞と関心の源泉でもある。
- なお、スキージャンプ競技を通じた両国の繋がりは大変深い。アルペン・スキーで旧ユーゴスラビア初となる銀メダルを獲得（1984年サラエボ冬季オリンピック）したユーリ・フランコ選手（2014年10月に外務大臣表彰）は、

1985年に現役を引退した後、新潟県を頻繁に訪問または居住して子供スキーヤーの指導にあたり、1998年長野オリンピックなどで活躍した皆川賢太郎、池田和子、山川純子などのスキー選手を輩出した。フランコ氏は、日本滞在中には高円宮殿下・同妃両殿下とスキーを通じた交流を行っており、当時幼少であった高円宮家女王にもスキーを教えている。

同氏は、2002年以降、活動の場をスロベニアに戻し、企業家として欧州域を中心に活躍しており、今も、スロベニア・日本ビジネス委員会の要の一人である。現在でも、機会ある度に日本を訪れ、特に、森雪雄元スロベニア名誉領事（元ラネット社社長、現在はスロベニアワイン等の輸出や文化交流に傾注するザリア社会長）とビジネス上の提携を有している。特筆すべきは、フランコ氏は2011年の東日本大震災後、東北地方の復興支援活動に精力的に協力し、スロベニアにおける義援金集めに尽力した。2016年も、東日本大震災を想起するブレッド城記念コンサートを森雪雄氏と共同実施し、記憶の風化に立ち向かっている。

- 一概にバルカン人はそうなのだが、スロベニア人の身体能力は高い。200万人の人口規模、つまり選手層が厚くないこの国では、従来、強いスポーツ種目が限定される傾向にあるのだが、現在では関心が拡散していることもあり、旧ユーゴ時代ほど特定のスポーツが強いという状態ではなくなっている。それでも、新しい種目に躍進する若手も続いており、こちらの人々は自分たちの得意分野や業績を喧伝しない徳があるので、あまり知られていないのだが、例えば、女子柔道では好成績を修めている。2012年ロンドンオリンピック女子63キログ級では、スロベニアのウルシュカ・ジョルニル Urška Zolnir 選手（34歳、身長173cm、五段、十字固めが得意技。スロベニア軍スポーツ群所属）がスロベニア柔道家初となる五輪金メダルを獲得し、同年、国内の優秀アスリートに贈られる「スロベニアスポーツ大賞」を受賞した。2015年の世界柔道選手権においても、女子柔道家が躍進している。警察や軍に所属して研鑽している例が多い。彼女らを知るスロベニア人に尋ねると、彼女らは好成績を叩き出しても謙遜するので、周囲の人間でさえその活躍振りを知らなかったりするようである。個性の強い地域の中で、謙遜もスロベニア人の特質の一つである。なお、スロベニア柔道ナショナルチームU17（ユースチーム）は、かつて、国際武道大学で合宿・合同稽古を経験している。我が国の高校や中学レベルでも、スロベニアとの柔道交流は活発である。
- スロベニア柔道連盟は1952年に設立され、国内には競技者・監督・審判を含め、約3千人の柔道関係者が活躍している。2013年10月には、スロベニア柔道連盟（カプロヴェツ会長）が在外公館長表彰を受けている。2015年10月には、同年夏の世界選手権銀メダルの田代未来選手（コマツ、201

4年・15年の柔道世界選手権銅メダリスト)がフランスに次いで、スロベニアに武者修行に出向いている。同年の世界選手権では、スロベニアのトレステナク選手が制していることから、好敵手の故郷で敵情視察を果たしている。

- 過去には、1964年東京オリンピックの体操(鞍馬)でミロスラウ・ツェラル選手(スロベニア現首相の父親)が、金メダルを獲得している。同選手は競技生活引退後、様々なビジネスを起業し携わっているが、76歳の現在も矍鑠としており(さすがに見事な握力)、スロベニア・日本ビジネス委員会の中でも、特に東京オリンピックに向けた両国間ビジネス展開に参加している。当国要人によると、ツェラル・シニアは現首相であるツェラル・ジュニアに対して何十年間も日本の良さを教え込んできているから、日本にとって最強のPRマシーンである。ご本人は、目立つことを好まない、至って謙虚なお人柄である。
- 人気のサッカーは国内での試合密度がさほど高くないこともあり、実力のある選手が国外に出る傾向が強く、特に日本サッカー市場は、安全で優れた生活環境と報酬の良さ、熱狂的なファンの存在、人間関係の良さなどから、スロベニア人サッカー選手にとって隠れた人気活動場所でもある。現在、サッカーJリーグの中では、2人のスロベニア人選手が活躍している(浦和:ズラタン・リュビヤンキッチ選手、大宮:ネイツ・ペチュニク選手、)。この他に、引退してスロベニアに戻ってきている元選手達も、日本にとっては貴重な応援部隊であり、両国の元選手達の絆を活用して、ボスニアの子供達に民族融和を促進するサッカー交流(人間の安全保障枠でのソフトな活動)をスロベニアにて試行する試みもある。

---

【注2】現在は米国資本下にあるエラン社は、2016年4月、営業合理化のためスキージャンプ事業から撤退し、ブランドの存亡が懸念されたが、スロベニアのスラットナー・カーボン社が同事業の引継を発表した。別ブランドとなるが、人員・技術は引き継ぐとのこと。また、同社は、2017年2月に日本でスラットナー・アジア(Slatnar Asia)社を設立し、アルペン・スキーの販売を中心に日本及びアジア市場への展開を進めている。

## 6. 不毛な土地柄転じて、ワイン栽培と大鍾乳洞という、喰える土地柄に

- スロベニアの南西部は、本来、不毛な土地柄とされてきた。国土の半分近くは石灰岩でできているとされる(面積の43%がカルスト地形という説もある)他、首都リュブリャナ周辺は元来湿地帯であり、古来の川を繋ぐ東西南北の通商路網の中でも、この辺りでは船荷の積み替えが難しかった。リュブリャナ周辺だと、湿地帯であるためにカエルが繁殖し、昔からカエルを食用する習慣がある。マスコットの一つが緑のカエルであるには、こうした由来がある。
- ところが、この不毛な土地はブドウ栽培には適しており、粘土質の密度の高い

土地よりもブドウの根が深く伸びるため、栄養度の高いブドウ耕作地となっている。加えて、スロベニアは、かつてセールス用語として「常にサニーサイド、スロベニア」というのがあったように、日照条件には恵まれており、小さな丘を見事な棚田に変えたブドウ栽培地の巧みと組み合わせられ、「同じブドウ品種でも丘毎に味が異なる」ワインを製造するに至った。イタリア人が国境を越えてワインや食事を楽しみに来るのも、頷ける。

- 一方の「カルスト」と呼ばれる、雨水が石灰岩のような透過性の灰岩を溶食することにより形成される珍しい地形の語源は、スロベニアの地名であるクラス(Kras)である(ローマ時代、台地の名前であった「kar(石)」から「Carsus」と名付けられ、イタリア語のCarso、ドイツ語のC(K)arstの原義)。現在、この地帯では6千以上の鍾乳洞が発見されており、なかでも、リュブリャナから車で30分ほどのところにあるポストイナ鍾乳洞は総延長23km、最大深度115mもありヨーロッパ最大級を誇る。鍾乳洞内では、夏でもヒンヤリしていて音響効果も良い地点もあるため、各種記念音楽会なども開催されている。日本人観光客にも大変人気がある。皇族としては、過去、有栖川宮威仁親王夫妻(1989年)、小松宮依仁親王夫妻(1894年)、高松宮宣仁親王夫妻(1930年)が訪問されている。
- 同鍾乳洞内には、目の退化した珍しい両生類プロテウス・アンギヌス(邦名:ホライモリ)が生息しており、皮膚の色が肌色のため類人魚(human fish)とも呼ばれている。独立後は、清子内親王殿下(2000年、当時)や秋篠宮同妃両殿下(2013年)も御視察になった。また、別のシュコツィアン鍾乳洞は1986年にユネスコの世界遺産に指定されている。

#### 7. 伝統的に高い言語能力と日本語を学ぶスロベニア人

- 記述の通り、スロベニアの外国語能力は極めて高い。小国には良く見られるが、最大の特徴は、非同盟の雄、旧ユーゴの時代からロシア語と並んで英語教育に力をいれてきたことから、特に50歳以下の人達の英語能力は特筆ものである。現在の教育システムでは、ロシア語の教師を確保し難いことや需要にもよりロシア語に達者な層は激減しており、その分、英語力は驚くほどである。リュブリャナ市内の屋外市場で買い物をして、また地方で買い物をしたり道を尋ねても英語で用が足りる。大学関係者の学術論文や教育言語としても、英語が主流になっており、高校時代から外国語に勤しんでいる。ザグレブに近い国境の町ブレジジェの総合高等学校では、生徒は英語、ドイツ語、クロアチア語を使用している。我が国の高校生との交流は教育再生への持続的な刺激になろう。
- 隣接諸国に囲まれ、言語的には必要な対応を常時求められてきたスロベ

ニアでは、外国語教育には活発である。生きる術が外国との交流接触であり、必然的に柔軟な対応が日々求められている。独立後25年を経過して、欧州言語を中心に複数の言語を習得している人が多々おり、北東部の第二の都市マリボルではドイツ語、西部のイタリア国境地帯全域ではイタリア語が日常的に話され、南東部ではリュブリャナよりもクロアチアのザグレブの方が近く、空港を利用するだけではなくショッピングも頻繁であり、クロアチア語が広く使用されている。

- 地理的に小さな国では、往々にして、その物理的な狭隘を払拭すべく精神の活発な活動が必要になり、遠方の国に対する関心も高いことがある。モダンアートに大きな関心が払われ、アンドレイ・イエメッツ氏という、欧州域でも著名なアーティストが生まれている。モダンアートを通じた日本との関係は心温まるものであり、我が国では、四国高松市に拠点を置く濱野年宏画伯がイエメッツ氏と協力しつつ、スロベニアとのアート交流を旧ユーゴ時代から長年にわたり行っており、2015年7月には外務大臣表彰を受けた。2017年9月には、スロベニア北西部のクランにてモダンアート展を共同開催予定。
- 日本語教育に関しては、筑波大学で研究し日本との関係が深いアンドレイ・ベケシュ・リュブリャナ大学教授（2016年12月で退官、以降非常勤講師）が1995年に同大学文学部に日本研究講座を開設するに及び、毎年、同大学で最も競争力の高い講座として多くの受験生を集め、現在のところ約170名が日本語、日本学を学んでいる。大使館や日系企業には同講座卒業生が幾人も就職している。また、卒業生の一人であるマヤ・ペシエル女史が「Genki Center」という日本に関する文化広報活動を主とする団体を立ち上げ、大使館とも協力して毎年、日本に関するワンストップ行事である「Japan Day」を開催し、多くの市民の関心に応えている。同大学文学部としても、本邦大学との交流協力強化に努め、2016年2月にはこのための東京ミッション（団長は文学部長）を派遣した。
- なお、2015年6月、駐日スロベニア大使がスロベニア人を両親に持つ落語家・桂三輝（サンシャイン）氏（カナダのトロント生まれ。本名Mr Greg Robic）をスロベニアの観光・文化等の魅力を伝える日本・スロベニア親善大使に任命した。桂三輝氏は2014年12月にスロベニアにおいて落語の寄席を実施している。

#### 8. そば文化を始めとする豊かな食文化を通じた日本との交流

- 小麦が育ち難い土壌のスロベニアでは、長らくそばの栽培が発達してきた。そ

ばの実を粉にし、餃子風にしてチーズやキノコ等と共に食べたり、そばがき風にしてスープや肉の付け合わせとして、あるいはそばパスタとして食べたりする他、そば粉を使ったデザートさえある。スロベニアの製粉業界トップのムリノテスト社は、そば粉を使ったパスタの販売を伸ばしており、2016年9月にはEU小麦業界外国訪問ミッションに加わり、他のスロベニア製粉会社等と訪日予定である。農産品の対日輸出に熱心な農林食糧大臣も関心を寄せている。

- 2013年8月には、スロベニア北東部のラシュコにおいて、第12回国際そばシンポジウムが開催された。同シンポジウムは、イワン・クレフト氏（現リュブリャナ大学バイオテクノロジー学部教授）の提唱により1980年に初めてスロベニアで開催され、日本でも過去2回（長野県、宮崎県）開催されている。スロベニアでのそばシンポジウムでは、日本からは多くのそば業界関係者が出席し、日本のそば粉を持参の上そばを打ち、各国からの出席者に日本風そばを振る舞い、喝采を浴びた。2016年10月には、江戸ソバリエ協会主催の特別セミナーにてクレフト教授が講演を行った。2017年には蕎麦職人・松本行雄氏率いる蕎麦打ち団体がスロベニアを訪問予定。
- なお、日本で唯一のスロベニア料理店は京都太秦にある（右京区太秦森ヶ東町29-7、電話075-871-0146、月曜定休）。地下鉄東西線太秦天神川駅1番出口を出て徒歩5分、「ピカポロンツァ Pikapolonca」（一階はカフェとスロベニア製品のショップ、二階がレストラン）がある。シェフはイゴール・ライラさん、奥様のライラ智恵さんと経営しており、「そば粉のズリヴァンカ」（山岳地帯の家庭料理である前菜。そば粉100%の生地のコテージチーズと赤タマネギを乗せたオープン焼き上げ料理。タルトのような感覚）などが、バティチ他のスロベニア・ワインと共に頂ける。ピカポロンツァとは「てんとう虫」（正式には店名と異なり、Pikapolonica と表記）のこと。スロベニアの歌に、「てんとう虫、飛んで行って、幸せを持ってかえっておいで♪」というのがあり、てんとう虫は幸せのシンボルとして愛されている（[www.ne.jp/asahi/pika/polonca/](http://www.ne.jp/asahi/pika/polonca/)）。

## 9. リピッツァの白馬

- ウィーンのハプスブルク王宮内で「スペイン乗馬学校」において白馬の馬術ショーが観光客の人気を集めているが、元々、その白馬（リピッツァーナ種）の産地はハプスブルグ帝国の現スロベニア領内にあった。リュブリャナからイタリアのトリエステ方面に車で1時間ほど走ると、旧宮廷牧場がある。今でも見事な一大白馬牧場であり、宿泊施設も整っている。
- ハプスブルク家は軍用馬の開発に取り組んでいる過程において、統治下のスペインからアラブ種であるアンダルシア馬を取り寄せ、地元のカルスト馬と掛け

合わせ、地名に因んでこの牧場に育つ馬をリピッツァーナと呼び、18世紀半ば頃まで重宝した。白く美しい毛並み特徴だが、生まれた時は黒や茶色の毛色であり、約7年で徐々に白い毛に生え替わる。この牧場では約340頭が飼育されている。なお、「リピッツァ」という土地名は、カルスト地方に原生するリンデンの木（シナノキ科西洋菩提樹）に由来している。

- この種の白馬は、二度の大戦中の疎開を経て、現在ではオーストリアで飼育されているが、原産地リピッツァでも牧場が残され、当時の技術が大事に伝えられている。なお、最近ではイタリアやクロアチアも、リピッツァーナ種白馬の本家本元争いに名乗りを上げている。なお、2016年6月に来訪された千玄室裏千家大宗匠は日本馬術連盟会長でもあり、白馬牧場にも大きな関心を示されたが、密度の高いご訪問日程の都合上、惜しくも訪問は叶わなかった。

#### 10. 小説・映画の舞台となったソチャ川

- スロベニア西部とイタリア東北部を流れるソチャ Soča 川は、その流れ全域で見られるエメラルドグリーン色から、「エメラルドの美しさ」「自然の宝石」と称されている。ソチャ川はカヤック、ラフティング（ゴムボートで急流を下るスポーツ）、溪流釣り、渓谷はマウンテンバイクなどで知られており、北東部イタリア国境近くのジュリアン・アルプス山系中、標高876mの石灰岩質山岳地帯トレンタ Trenta 渓谷に発する約136kmの川である。一部は鉄道も併走する有名なソチャ渓谷を形作り、最後はイタリアのモンファルコーネ（トリエステ空港が所在）近くでアドリア海に注いでいる。歴史的には、第一次大戦まで、この川がイタリア王国とオーストリア・ハンガリー帝国の国境を形成していたため、1917年のカポレットの戦いに代表される一連の戦闘が発生した。
- 第一次世界大戦ではイタリア軍とオーストリア＝ハンガリー軍が激しい戦闘を繰り広げたことから、ヘミングウェイの小説『武器よさらば』の舞台となった。1915年から1917年までの2年半の間で、両国軍に30万人以上の死者を出した（応援のドイツ帝国軍による毒ガスが、コバリド＝イタリア語カポレット＝においてイタリア第二軍に使われたことでも知られるこの戦いは、「イタリア軍事史上最大の敗北」と称される）。また、2008年のディズニー映画『ナルニア国物語第二章』の撮影場所としても知られている。上流部は、アドリア海河川の固有種マーブルトラウトの生息地だが、現在は絶滅の危機に瀕している。
- ソチャ渓谷は欧州でも一級の渓谷釣りの聖地の一つであり、欧州中から渓谷釣りファンが訪れている。日本商社欧州駐在員にも、ここでの渓谷釣りは人気が高い。またこの渓谷の一部に沿って走る鉄道線は、ポーヒン湖まで繋がっており、特に夏場は機関車運行があり人気を集めている。

## 1 1. 姉妹都市関係

- 新潟県新井市（2005年以降、妙高市）は、アルペン・スキー銀メダリストのユーリ・フランコ氏の働きかけにより、1996年、新井リゾート（株）と共同で開催した国際交流イベント「スロベニア・ウィーク」をきっかけとして、北東部のオーストリア国境に近いスロベン・グラデッツ Slovenj Gradec 市と交流を開始し、2001年9月に新井市で姉妹都市協定調印式を行った。スロベン・グラデッツ市は、古い教会、町並みなど芸術的遺産がそのまま残る芸術、文化、歴史の町である。最近では、2011年には、10年間の交流を綴った記念誌を出版し、2014年9月には、妙高市からの訪問団が来訪し交流と意見交換を深めた。翌年2015年9月にはスロベン・グラデッツ市の高校生訪問団が妙高市を往訪し、高校生を含む一般市民との交流を実施した。2016年10月には、入村明・妙高市長がスロベン・グラデッツ市を訪問した。
- また、正式な姉妹都市関係ではないが、熊本県水俣市とイドリア市、秋田県男鹿市とプトゥイ市の間で交流がある。イドリア市は水銀鉱山のある町として知られ、旧市街や鉱山跡地はユネスコ世界遺産に指定されている。他方、プトゥイ市は春先に開催されるクレント（秋田県の「なまはげ」に近似）のカーニバル開催地として有名であり、男鹿市からも参加したこともある。

## 1 2. スロベニアにおける武道、茶道と華道の普及

- 旧ユーゴ時代から、日本の武道が紹介され、先駆的な武道関係者の普及努力を受け、柔道（5. の通り）、空手、合気道などが普及した。独立後も、こうした関係者の長年の蓄積を踏まえ、多様な流派の武道クラブが活躍している。
- スロベニアにおける剣道としては、欧州指導経験が豊富な平川信夫氏（東京教育大学卒、元明治大学教授、体育・武道学、教士8段、居合道教士7段、日本武道学会名誉会員）の活躍が特筆される。初段以上の我が国国内剣道人口は約177万人（柔道の国内競技人口は約16.5万人）とされ、海外では全体で50万人程度と見積もられている。海外普及に長年捧げてきた平川教士の「異文化の理解は容易ではない。剣道が、民族や国、更に宗教、伝統、言語、風俗、習慣などの違いを超え、一つの自己啓発の文化として受け入れられてきたのは、稽古を通じた不断の対話と交流の積み重ねによるものだ。」との指摘が重要である。ある意味で、大矢稔 国際武道大学教授の言う、「辟邪の剣」（剣は外敵と自己の邪陰を払うという二面性を持つ）「守破離」（没個性的な形の鍛錬は、やがて融通無碍な技の使い方へと発展する）を目指し、平川教士による稽古である、「竹刀と真剣双方の扱いを通じて正しき手の内を習得し、正しき姿勢と攻めの心持ちに集中し、姑息な一本を狙わず、常時、真っ直ぐな心とたっぷりの気合い」を実現してきている（トピチュ・スロベ

ニア剣道連盟会長)。「日本剣道形3本(間合、正中線、中心)の本意を良く学んでいる。

スロベニアでも、日本文化や武道の紹介行事は常に大入り満員であり、2011年には新渡戸稲造の「武士道」がスロベニア語に翻訳されているほどであり、国境を越えて普遍的な原則の探求と武道家への道に関心が持たれている。

そのスロベニア剣道連盟(ペテル・トピチ会長、4段)は、平川教士の指導協力を得て、1999年に本格的な活動を開始し、2003年8月には、スロベニアで最初の「国際剣道セミナー」を催し、2010年には第二回国際剣道セミナーと「第一回サムライカップ」を合わせ開催し、その後も各国からの出席者の数は増え、平均100人を超える参加者が集っている。2014年3月及び2017年3月には、全日本剣道連盟から剣道具が贈呈されている。現在、スロベニアの剣道家人口は約50人であり、同連盟に所属する道場(クラブ)は5カ所であり、最近では、オーストリアやベルギーの審判セミナーにも参加している。

- スロベニアにおける空手の歴史は40年を超え、スロベニア空手協会は1969年に設立され、63の団体が所属し約1500名の空手家が登録しており、空手人口は6千名ほどとされている。2014年3月には、中部にある古都ツェリエ近くのラシュコ Laško において「空手世界カップ」が開催され、当時のブラトウシェク首相も出席し、世界40カ国から約350名の空手家が参加した。また、沖縄空手道松林流喜捨場塾も活発にスロベニアを訪問しており、2015年には田島一雄 喜捨場塾三原道場主(沖縄県那覇市)がスロベニア空手セミナーに同行している。テレビニュースのアンカーの子息など、多くの子供達が柔道、空手を習っており、日本への関心を育んでいる。
- スロベニアにおける合気道としては、合気道開祖 植芝盛平の最後の内弟子を務めた合気道8段の清水健二氏(世田谷区太子堂「天道流合気道天道館」管長、76歳。2002年、外務大臣表彰受賞)が1978年以降、スロベニア他の欧州諸国指導を開始したことが大きな契機となった。他流の合気道家達の活躍も顕著である。スロベニア正道館代表であるマテアジュ・ドブラベッツ氏は、スロベニア国内に道場を6カ所所有し、約100名の会員に合気道を教えており、2009年3月には大使(在外公館長)表彰を受けた。
- スロベニアでは弓道も活発であり、1979年から黒須 憲東北学院大学教養学部人間科学科教授(筑波大学大学院修士課程体育方法学専攻修了、稲垣源四郎弓道範士に日置流印西派を学び、欧州弓道連盟設立にも立ち会い)がスロベニア他で弓道セミナー講師を務めている。黒須教授は弓道の普及に務め、例えば、弓道の手の内(握り方)について、「紅葉重ねの手内」という伝統的な秘伝を分かりやすく説明している。
- 我が国を代表する文化の柱である茶道と華道も、徐々に広がりを見せている。20

06年9月、裏千家淡交会国際部の援助を受け、リュブリャナ市内にある民俗学博物館のカルチャー教室として、パウラ・ブラガ・シメンツ女史（ルーマニア人、京都裏千家に短期留学）を講師に迎え裏千家の茶道教室が初めて開講された。その後、同氏からの依頼を受け、2014年8月よりは裏千家淡交会東京支部茶道教授・村上由美子氏らが年3回スロベニアを訪問し、茶道教室での指導を行い普及に務めた（2016年3月、村上氏は在外公館長表彰を受けた）。そうした積み重ねを背景に、2016年6月には裏千家淡交会スロベニア協会が正式に設立されることとなり、千玄室大宗匠がスロベニアに来訪され、発会式他の一連の設立記念行事を開催した。現在、茶道教室の受講生は約15名。今後はスロベニア協会の人的資金的基盤を強化すべく、首都リュブリャナ以外の地方都市へも活発な活動拡大が期待される。

スロベニア人は伝統的にハーブティーに関心がある健康志向であるため、最近は特に緑茶（煎茶等）、抹茶に関心を抱く層も増えている。中東を中心に抹茶の健康効果を実践的に紹介しているのが、宇治の貴福園社長の貴森みき社長（裏千家准教授）である。2016年3月にはスロベニアに活動の場を伸ばし、リュブリャナやワインの産地ブルダ地域において、お茶の効用と抹茶の点て方の講演とデモンストレーションを行い、パホル大統領も表敬し献茶した。スロベニアでは、抹茶普及の可能性は既にかかなり大きい。

- 華道・池坊イタリア支部（所在地：ローマ）において生け花を学んでいたスロベニア人男性華道家・ミロスラウ・ガヴラン氏（空手家でもある）からの依頼を受け、同支部共同創設者でもある池坊華督・目崎真弓氏が、2011年頃より、ガヴラン氏の居住地である地中海沿岸都市コペル市を訪問し、華道の稽古を実施している。2016年1月23日には、スロベニア華道協会が設立され、同協会代表にガヴラン氏が就任した。同協会は、コペル市での活動を中心にスロベニアにおける華道の普及に努めており、同年6月には、同市の全面協力を得て、同市儀典ホールにおいて目崎華督による初のデモンストレーションを成功裏に実施した。

スロベニアは自然の豊かな国である。路傍にも魅力的な花は沢山見られる。スロベニア人女性は花には大きな親しみを持っているが、欧州的なフラワーアレンジメントくらいの技量である。先のデモンストレーションで拝見していると、生け花はまだ新しい領域であるので大きな関心が示されており、参加者は目崎華督の実践的な説明に頷きながら、展示花を熱心に見ていた。生け花の展開には時間はかかるだろうが、良い可能性がある。

### 13. 日本との大学・学術・研究交流

- スロベニアの大学教育は無料で賄われ、英語による論文作成や授業も普及し始めており、各大学も学生数の確保の観点もあり、外国学生の受け入れや国際教育センタ

一（英語教育）にも力を入れており、日本人学生の受け入れ環境が進んでいる。また、卒業者の就職率はかなり高く、比較的新しいノヴァ・ゴリツァ大学（旧ノヴァ・ゴリツァ工科大学）の例では就職率はほぼ100%近い。北東部の第2の都市にあるマリボル大学でも、特に理科系の学生はオーストリア（グラーツ等）に就職するため、同地域に所在する日系企業ダイヘン（産業ロボット製造）社も同大学に就職説明会を開催しており、技術系社員の採用には苦心している程である。

- 日本との関係では、最近の留学生受入数は年間20名強であり、日本人留学生の派遣数は30～40名程度である。研究者の交流という面では、受入数が50名程度、派遣数が160名程度となっており、双方で200名前後という水準である。また、スロベニアの4つ国公立大学（リュブリャナ大学、マリボル大学、ノヴァ・ゴリツァ大学、プリモルスカ大学）等とは、日本の大学22校が大学間交流協定を締結している。人文系では、リュブリャナ大学文学部アジア研究学科にある日本語・日本研究コースや社会科学系を中心に、筑波大学をはじめ、東京大学、東京外国語大学、城西大学等との間で交流が一定範囲であるが、より具体的な交流が期待される。具体的な活動面では、城西大学がノヴァ・ゴリツァ大学とプリモルスカ大学との間で意欲を示している。また新たに、同志社大学も、大学間交流協定締結を視野に入れ、リュブリャナ大学社会科学部と実質的な交流活動（同志社大学大学院博士課程の学生によるフィールドワーク）を開始しており、大学間交流プログラムの実施や両国における学術会議開催を検討している。さらに、山梨大学もリュブリャナ大学医学部と先端臨床医学分野における協力を模索している。他方、マリボル大学、ノヴァ・ゴリツァ大学（イタリア国境）、プリモルスカ大学（地中海沿岸コペル）では、自然科学系分野における研究者間の交流が軸になっており、特にノヴァ・ゴリツァ大学にはワイン研究所があるため、山梨大学附属ワイン科学研究センターが協力を模索している。
- 日本との先端技術研究交流は特筆に値する。つくば市との関係は長くかつ密度が高い。例えば、大学共同利用機関法人「高エネルギー加速器研究機構KEK」には、リュブリャナ大学やノヴァ・ゴリツァ大学などから10人を超える研究者が派遣されており、約300人の国際共同研究チームの中で一グループを率いて活躍中である。スロベニアにはそうした最先端科学研究者が活躍する機関や会社は存在せず、スイスのローザンヌのように先進各国で活躍する研究者も多いが、国内の技術力を牽引するためには最先端技術の研鑽が必要であり、その意味で我が国との交流やプロジェクトへの参加継続には強い希望と期待がある（当国最先端の技術研究機関であるヨゼフ・ステファン研究所元所長・現ノヴァ・ゴリツァ大学学長）。そのヨゼフ・ステファン国立研究所も、物理学や原子力工学等の分野において、日本の研究機関（名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構等）と活発で良質な研究者交流を実施している。

#### 14. 東日本大震災～小さな国スロベニアからの大きな支援

- 東日本大震災に際し、スロベニア政府から日本政府に対し義援金15万ユーロが贈られた。またスロベニアのプレハブメーカー「TRIMO」社は宮城県南三陸町にユニットハウスを寄贈し、集会所として利用されている。このほか、スロベニアフィルハーモニーによるチャリティコンサート、各地の小学校児童による千羽鶴の寄贈、ボランティア団体による献花や蠟燭点灯などの被災者追悼イベント等が行われた。
- また、記述のフランコ氏も当時募金集めに奔走し、2016年6月には、長年、スロベニアとの文化・ビジネス関係推進に貢献している森雪雄ザリア会長と協力して、追悼のためのコンサートをブレッド城で開催し、日本人ジャズ・ヴァイオリスト牧山純子氏が同氏の新曲「スロベニア組曲」を披露した。